

くぐもり声

馬場 駿

『見上げるな、空がバツクだと雪の白が汚れる』
ゆっくりと左掌を差し出してみた。案の定、雪は待
っていたかのように、ふわりと着地した。一瞬結晶が
見えたような気がした。温かい俺の手が雪を——消し
た。今度は跡形も無く。水気さえ残さず。

その日のための初日

同じく二日目

苔生（こけむ）した広さ一平米程度の岩が目の前に横
たわっていた。ただ一番上の部分は、絨毯のような感
触とは程遠く、垂らした白ペンキが平らに広がったと
しか言えないもので、岩肌の凹凸が掌にそのまま伝わ
ってきた。しゃがんで微妙に違う白の境目をジツと見
詰めていると、淡い灰白色の何かが目の前を落ちてい
く。

一尺ぐらい積もった雪が黙（もだ）している。気の遠
くなる程の、億兆の単位で結晶がここに集まっている
のに。

『え？ もしかしたら』と、急いでピントを合わせる
と、紛れもない——雪。笑顔でもあげようと思ってい
るうちに、岩の白に吸い取られて、消えた白。小さな
湿り気だけが、ぼっん。
もうひとひら降りてくる、きつと。

『気が狂いそうに、静かだ』

何か突き刺してみようと思った。雪の似非（えせ）お
上品は醜い。里山の作業小屋だったはずだからと思ひ、
半周したところで平スコを見つけた。手にとって振り
上げると、目の前の雪が避けて左右が盛り上がったよ
うに見えた。

『ありえない』と頭を強く左右に振った。次いで突き
刺して雪の傷口を抉（こじ）る。すると、確かに、キュ
ツと泣き声をした。裂け目の右側に泥が付いた。左側

は赤茶の錆色に染まっている。

『汚い——悪かった』

雪に謝ると、何かに憑かれたように、ウインドヤツケの裾でスコップをこすり続けた。

二度目は滑るように雪に入った。平スコの柄を少し揺すってから引き抜く。目を見開き、ヒツと息を吸った。雪の裂け目がピュアな水色に染まっていたのだ。

『何と澄みきったブルー……』

愛おしげに右手をさし伸ばし、蒼あおに触れようとしたそのとたん、雪が掌を挟んだ。親指だけが丸ごと雪の外で蠢(うごめ)いている。

慌てて反り返り、全身で右手を助けようとした。

……抜けた。

その瞬間、誰かの絶望的な絶叫が雪の山野に甞(こま)した。誰かが自分だとは思いたくなかった。

親指以外の四指が雪に奪われていたのだ。

動いた二日目

小屋を出て五十メートルほど雪中を歩行しただけで

全身が汗みどろになった。

『なぜこんなに道が狭い』

雪を積んだ篠竹が重さに負けて、全員がお辞儀をしているからだ。すぐに気付いた。目の前の一人が耐えかねて、頭の上の雪を振り落とした。曲がっていた背は真直ぐに伸び、勢い余って隣の背高な仲間を叩いた。

細かく分かれ飛び上がった雪が、風に乗ってやってくるのを、避(よ)けもせず顔で受ける。

——「これ長野じゃ美篤(みすず)つていうのよ」

急に京(みやこ)が頭の中で喋った。『美篤刈る信濃の国の千曲川』そこから先の歌詞は知らない。形のいい唇を自在に動かして、京は澄んだ声で唄った。

見惚れたときから先は、記憶が欠落している。

——気が付くと、篠竹が雪を振り落とす連鎖は、遙か彼方まで続いていた。飛散した雪の子らが景色を切り取って、霧の中へと誘(いざな)つてゆく。

『引き返そう。先が見えない』

踵を返す俺の目に、熱い涙が噴き出した。

『食い物なんて必要ないんだよ、バカが』

予想外の四日目

深さ一尺の雪の上を普通に歩ける。氷点下五度という気温が積もった雪を凍らせているからだ。

静けさにも音がある。暗く沈んだものを抱え込んでいない人には聞こえない音だ。

夜空には無数の穴が開いている。心清らかな人たちはそれを星と呼ぶ。

『月もか。いや、月はどこまでも月だ』

しかしそれも太陽が出るまでの主役。空に間違つて居並ぶとき、月は恥じ入って赤くなるという。

不覚をとって滑った。

大事に持っていた便箋の束が氷の上を走る。

回る。冷たく固まった雪の上を。ジタバタして、イヤヤヤをして、グルグルと手を回して。

「燃やせ、未練の紙くずを」

誰かが言った。いや、自分だ、ごまかすな、俺自身だ。

『もう手に持つてるんだよ、偉そうに指図するんじゃない。

ねえ』

ライターが光を、くれるんだ。心を縛り、絶望のどん底へと突き落とす、美しい文字からの開放を。

火がつくと、紙は黒ずんで縮み、紫煙を放つて、苦しみだす。爆発的な炎上はそのあとだ。自ら燃えることで宙に浮く。飛び立つのだ、手紙が。京みやこの香りが。優しさが。

手紙を重ねておいて横から火を放つ。

何枚も何枚も、燃えて飛ぶ、を繰り返す。舞っているのは紛れも無く紙の上の恋。

『よし、一緒に回ろう』立ち上がって、『立ち上がってだ!』

叫びながら、突っ伏して泣く。涙が止まらないのだ。

何が哀しいのか、俺自身が分からない。

白く冷たい雪と赤くて熱い炎の狭間に。いま、この真つ黒な景色の中に——独り、俺がいる。

まだ五日目

急に腹が痛み出した。食糧が切れて二日目になる。

登ってきた当日は昼、夜ともコンビニ弁当を食った。二日目と三日目はチビあんパン一個とウーロン茶のみ。食あたりをするほどのものを胃に入れていないのだから、考えられるのは「冷え」だ。

予想外のことだったが、幸いにも小屋には寝具があった。おそらく長期に亘る森林の下刈（したが）りか何かで、休息用においていったのだろう。捨ててもいいという感じで粗末なものだったが、氷点下で体温を保持できるだけでも有り難かった。

午後になって熱も出てきた。しかし今のうちならまだ、歩ける。

近くの小さな沢に下りてタオルを濡らし、コッヘルに更新用の冷水も入れた。

『え、誰?』

ふっと人の気配を感じて、振り返った。

——「いまね、お魚がいた。小さな岩のところ」

膝に掌を当て川面を覗き込む京（みやこ）の髪が、雑木林を漕（く）ってきた風に揺れている。

「山女（やまめ）だな、だとすると、枯葉の塊（かたま）りの下に隠れてる」

「ほんと？ 獲れたらいいね」

真直ぐに背を伸ばした京。その顔が、俺の数センチ先で微笑んだ。腫（め）がきらきらと輝いている。

撓（しな）う篠竹につかまって、右足を斜面に、左足を小岩に掛けて、両掌を枯葉をつかむ形にして下ろしていく。

「逃げちゃうよ、そんなに近づいてえ」

「シート、山女は見つかりっこないって思ってるよ」

「うそばっか」と声を殺して、弾むように笑う京。

水に浸（つ）かった枯葉を丸（ごと）と掬（すく）い、高々と放り投げた。

「あー、お魚あー」

抜けるような秋の空をバックに、尾鰭（おびれ）を大きく振って山女が飛んだ。

——体中がゾクゾクして、思わず額に手を当てた。

『立ったままで夢かよ。熱の所為だな』

せせらぎが急に耳に響いた。どうやら嘲（わら）われているらしい。

下痢が始まった。トイレが無い小屋なので、入り口

の扉の脇に雪を固めて和式を造った。もちろん囲いも糞溜めもない。

ろくなものを食べていないので水のような使しか出てこないが、一人前に体力の消耗は、一回ごとに激しさを増した。

食べ物も、薬も無い。看護してくれる者もない。いや、俺がこの小屋に居ることを誰も知らないのだ。出来ることといえば、自分の治癒力を信じて、傷ついた獣のようにじっとして、体力の温存を図ることだけだ。そう、眠ることだけだ。

その大事な眠りが、しばしば下痢で妨げられた。意識が遠くなる。眠りなのか、気絶なのか。それとも『このまま死ぬのか』。

ふっと笑いが来た。可笑しかった。死にに来たのに望むものを恐れてどうする。

——丸ノコの回転音が聞こえる。木材を刻む高い音に変わる。そのとき俺の目に、長い角材を持ってよるけながら傍を通るアルバイトの姿が映った。

「バカ、危ないったら、おい、学生！ 離れる学生！ ほんの一瞬のことだった。顔中に血しぶきを浴び、

あとから右の指先に激痛が走った。心臓の弾ける音が聞こえた。救急車のサイレンを聞いたのは、それからずつと経つてからのような気がする。

よそ見をして木材の切断を続けていた俺。結局利き腕の、親指を除く四指を、第二関節から失った。

覚えていないのだが、俺は地べたを転がりながら、飛び散った指先を捜していたという。痛みには耐えかね、泣きながら、何かを喚(わめ)きながら。

同僚は病院で同情を露(あらわ)にしてそう言つと、「なあ壮太(そうた)、ミヤコってお前の彼女か。何度も何度も呼んでいたぞ」と俺の顔を覗いた。

——『ああ、宝(たから)だった』
腹がまたぐ、ぐぐるつと不気味に鳴り出した。
『もう過去形、だけどな』

布団を跳ね除(の)け、外の「トイレ」を目指して扉へと走り出す。と、その瞬間、足がもつれて前のめりに倒れた。

股間が生暖かくなってきたとき、京とは別の世界に心移し、大声を出して嘲(わら)った。

何日目か

外が明るくなつてから目が覚めた。

どれくらい眠つていたかは分からない。起き上がる力がないことは確かだ。それでも肛門の騒ぎは大分治まつてきている。

ブリーフもズボンも汚してしまつた俺は、直に夏用の半ズボンを身につけている。布団の中で自分の男をしっかりと握つてみる。

京みやこの女の髷ひだの手触りを想う。一度も触れたことの無い柔肌の温もりを想う。

『抱きたかった。実際にこの手で』
この手で、指の欠けたこの手で？

飛び散つて赤い斑点になつた自分の血。血の雀斑(そばかす)をいまも洗い流せずにいるこの顔では、京の唇さえ奪えない。もう手紙もかけない。あなたが褒(ほ)めてくれた、好きだと言つてくれた、綺麗な文字が、一文字も書けない。唯一残されていた糧を得る仕事、木工もできない。家具も家も造れなくなつた。

自分の歯で、強く唇を噛んでみる。まだ生きている証か、淡い塩気の、血液の味がした。

——「……壮太、あなたは言いましたね、目が色弱で大好きだつた絵を捨てたつて。それでも何かを創りたかつたから高校を出てすぐに、木工の親方のもとに弟子入りしたつて。それなのに、事故で指を失つて、今度は生きていくためのジョブを、昔の宮大工にも負けない仕事をしたという夢を、捨てるつて？……それつてずるいよ、自分の能力に対する裏切りだよ。絵を見失つたときに次の目標を立てたように、壮太なら今度もきつと何か見つける。京はあなたの、ぜつたい負けないつていう心の底力を信じているから、あなたが好きだから、同情なんかしない。いまずぐ飛んできて一緒に泣きたいけれど、そんなこと、しちゃいけないんだ。そう思う。今度のお給料でノートパソコン買って贈る。だから、苦手だなんて言わないで、キーボードを心で叩いて、お便りをください。あなたの元気な声、待っています。

壮太の居るところから少し遠い長野から。みやこ——『さすがペン。パルだよな。距離を置いたんだろ、

京。結局……』

そこから先は、口にしてはいけない。たとえ心の中だけの声でも。いま一番、いや、俺の人生で一番、言葉にしてはいけないことなのだ。

『やっぱり京だけは、最期まで信じていたい。そうではなくちや俺って、寂しすぎる』

水漬が鼻から滲み出た。溢れ出た涙が、それに追いついて重なった。

目覚めた次の日

『——まだ生きてた』

枕もとの二リットル入りのウーロン茶がカラになっていた。コッヘルの水も無い。タオルの水気も無かった。砂漠を歩いた後もこんな感じなのか。唇が乾ききっていて、上下で擦(こす)るとザラツと音がした。胃も腸も空っぽ。空腹の音さえ出せないだろう。

不思議に想いが透き通ってきた。

小屋中に満たされた冷気すら俺の周りには寄って来ない。そんな気がした。上半身を覆っていたウインド

ヤツケを摘まみ、中の匂いを嗅いでみる。鼻が曲がりそう、顔を顰(し)かめた。

『百年の恋も興醒めだな』

心が嘲(あざわら)ったあとで『フン!』と言った。

『女もいねーくせに』か。

のそのそと起き上がると、太腿(ふともも)から下を目がけて寒さが襲ってきた。慌てて登山靴用の靴下を穿(は)く。

両足の脹脛(ふくらはぎ)までが覆われた。

入り口の扉が外の強い光で縁取られている。

予め目を細くしてから体ごと押してみた。

『……』

すでに日は高かった。

下り傾斜の径(こみち)を挟んで、幹から梢(こずえ)に至るまで、全身を雪化粧した落葉樹が並んでいる。

どこからか来た大型の野鳥が止まりきれずに、枝に積もった雪に突っ込んだ。羽ばたきが創った微細な雪片が柔らかな風に乗って宙に舞う。葉も花もつけていない冬木立が、まるで満開の桜のように、その妖艶さを競っている。近いものは、陽光を受けて結晶を輝かせ、

花ではなく雪であることを知らせてくる。波打つ白の濃淡の彼方にある空の色はどうだ。どこまでも均一な耀(かがや)きに満ちたコバルトブルー。心で引き寄せれば、掴み取れる気がする。

——「満開の桜つてね、雪積む木つて言うの。だけどこれ、桜をほめてるの？ それとも雪？ 壮太はどうちだと思っ」

——『そういえば京みやこ、文学部出だったっけな。桜を目の前にして言うんだったら雪が格上(かくう)えに決まってるだろ』

俄か雨でこの小屋に一緒に避難したあのとき、確かワングル部のもう一人の女学生は桜だと言い張った。傍らで微笑していたのが京。この子、頭も氣立てもいいとそう思った。「私は雪が格上だと思っ」と、言葉で無くて微笑(ほほえみ)で知らせていたから。いま極上の景色を味わいながら、それは確信に変わった。

『花もなく葉っぱもなく美しくなれる木々、か。そんな道もあるかもな』

京は俺にとつての雪。きょうのこの雪。

『だいいいな。もう、遅いけど』

とりあえず水だ。脱水症状が出ていると自覚して、沢へと歩き出した。

とたんに、思わず苦笑した。

『何だ、生きようとしてるじゃん』

滑っては転び、吹き溜まりの雪に足を取られては前にのめった。そのたびに自分の情けない格好を見て雪を叩き、大笑いをした。

『高熱も下痢も身体が勝手に治しちゃった』

もう失うものは何も無い。これを笑わないでどうする。顔色もかなり酷(ひど)いに違いない。たぶんムシクの「叫び」状態だろう。

這いつくばった後で立ち上がり、雪を払い落としていると、前方に人の氣配を感じた。幻を見た。いや、本当に人が見えて、目をこすった。

『やっぱりここだったのね』

『みや、こ？』

一体何日声を出していなかったのだろう。久し振りの発声が、彼女の名、京だった。なぜここにいる。なぜ俺がここだと判った。きつちりと山歩きの格好までして。出逢ったあの日と同じだ、スカーフの色まで。

「何しにここに来たのお…壮太」

近づきながら半ベソをかいているのが分かる。
胸が張り裂けそうになった。

言葉が口をついて出てこない。

「家電（いえでん）にかけた…家出したって、おかあさんが…どこにいるか捜してって…泣いてた」

汚い自分の顔が、さらに歪んでいる。そんな馬鹿なことを、ゴトゴトと心音を大きくしながら思った。

「ここよ、すぐわかった。わたしがいまの壮太なら、同じ発想をするもの」

立ち止まった、京。

近づけない俺。

「生きよ、一緒に、ね？」

そう言つてゆつくりとうなづく、京。この上もなく、きれいだと思つた。

「……うん……」

急に噴き出した涙で、京の顔が揺れた。

それが笑顔だと分かるまで、心も揺れていた。

立ちすくむ二人の間を、雪の子が風に乗つて、騒ぎながら通り過ぎていった。